



2006年8月よりアメリカ合衆国フロリダ州にあるマイアミ大学へ2年間留学し、帰国しました。アメリカ留学は専門を移植外科に定めた頃からの夢だったので、本当に楽しく充実した2年間でした。

私の留学の目的は膵島移植を学ぶこと。膵島移植は、ドナーの膵臓からインスリンを産生する β 細胞を含む膵島を酵素による消化と遠心分離によって精製し、重症の1型糖尿病患者の門脈に注入する移植治療です。2000年にカナダのアルバータ大学から新しいプロトコルが報告されて成功率が大幅に高まり、現在アメリカでは大規模な臨床研究が行われています。マイアミ大学 Diabetes Research Institute (DRI) はその中核をなす施設です。

アメリカは自由競争の国で、チャンスにあふれていると言われていますが、実はある意味日本以上にコネが大事な社会です。ボスが人を雇う場合、雇った人間のできが悪ければ周りからのボスの評価も悪くなってしまうことがあります。したがって新しい人間を雇う場合は慎重にならざるを得ず、信頼できる推薦者のいる人から雇うことが多くなります。推薦者のいない私はポジションを得るのがなかなか難しく、留学先が決まらずにやきもきました。

当時私のボスであった前移植センター長の橋倉泰彦先生がマイアミ大学移植外科の加藤友朗先生をご存じだったので、まず肝臓移植チームのオブザーバーとしてマイアミへ渡りました。臨床プログラムに入ったわけではないので患者の治療に直接関わることはできず、移植手術は見学するのみでしたが、ドナー手術に参加することができました。

その間にDRIで研究主任をされている神戸大学出身の市井啓仁先生とお会いすることができ、Research Fellowship プログラムに入ることができました。マイアミ大学の日本人ネットワークというコネが役立ったわけですが、市井先生からは「ポジションが決まらないうちに渡米するなんて度胸があるね」と感心(?) されました。ゼロから行った事務手続きは、今思い出しても鬱になってしまうくらい大変な作業で、自分でもよくポジションを得られたな、と苦笑してしまいます。

DRIに移ってからはヒト膵島細胞分離を学びながらポスドクとして研究をしました。全米で行われている大規模な臨床研究にも参加し、他大学とのやりとりを通じてこの分野の知己を増やすことができました。

フロリダ州はアメリカの南端にあり、数100マイルに及ぶビーチを有する南の楽園で、ハワイ州、カリフォルニア州と並びアメリカの富裕層が老後に暮らしたい州のベスト3にランクされています。迎賓館かと思まごうばかりの豪邸が建ち並び、高級車が走り回っています。自家用の船やヨットを所有している人も多く、海岸や川沿いにはヨットハーバー付きのところもあります。もちろん留学の身ではそのようなハイソな遊びはなかなかできませんが、ちょっと出掛ければ青い海、白い砂浜が広がり、しかも常夏なので遊びにはこと欠きませんでした。

また、マイアミはキューバを始めとする中南米からの移民が多く、市民の半数はスペイン語を母国語としており、流れる音楽はサルサ、食べ物は中南米料理で、生粋のアメリカ人は「マイアミはアメリカではない」と言うくらいのラテンワールドでした。おかげで様々な国出身の人と友人になることができました。

この2年間、本当に貴重な経験を積むことができました。このような外科医不足の折にも関わらず快く送り出してくださった宮川眞一教授を始め外科学第1のみなさまに感謝の意を表したいと思います。一般病院で研修を行う先生が増えていますが、海外へ出て世界を知る機会を得られるのは大学ならではの経験です。ぜひ多くの先生が自身で異なる国の医療や研究を体験し、見識を広げる機会を得られるよう願っています。私も海外で学んできたことを今後に生かしていきたいと考えています。

(2008年12月)